

くすり博物館だより

VOL. 53

平成17年(2005)4月

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY



内藤記念くすり博物館
〒501-6195 岐阜県各務原市川島竹早町1
Tel: (0586) 89-2101 Fax: (0586) 89-2197
<http://www.eisai.co.jp/museum/>

2005年度企画展「趣味多彩 ある漢方医のコレクション」 4月29日(金)～11月27日(日)

テーマ特集◆ 医薬史資料・絵巻物など

内藤記念くすり博物館では、今年度の企画展として「趣味多彩 ある漢方医のコレクション」を開催いたします。このコレクションは、大正から昭和にかけて漢方医として名声を博した中野康章(1874～1947)が長年にわたって収集したものです。

中野康章は秋田県出身で、代々神職けんしやくの家に生まれました。幕末から明治にかけて活躍した漢方の大家・浅田宗伯しんぺいに学び、漢方医学の研鑽けんたんを積みました。大阪・福島村社中之天神社てんじんしゃ掌しやくに従事しながら、多くの患者の治療を行ないました。気さくな人柄で人望も厚く、医院の看板をかかげていないにもかかわらず、診察に訪れる人が後をたたなかつたといわれます。

康章は神職や医業のかたわら、多くの書籍、資料を収集し自ら「大同薬室」と称しました。蔵書は医学、薬学関係だけでなく、多岐の分野にわたっています。また、書画・地図・絵図・絵画・絵巻物・和歌や俳諧の短冊などの資料を集め、大切に保存してきました。趣味多彩で多方面に造詣が深かった事がうかがわれます。

このコレクションは多くの医薬の先駆者や、江戸時代の文学、歴史を物語る貴重な資料といえます。その趣味の一端に触れて、人となりを知っていただければ幸いです。



中野康章(1874～1947)

絵巻物の世界

絵巻物は、横長の巻物まきものに詞書ししよとその内容を表す絵が書かれたもので、平安時代から鎌倉時代によく作られました。その主題は、物語・日記・説話・御伽草紙から、戦記・社寺縁起までと非常に範囲が広く、内容も多岐にわたっています。

文章はもちろん、人々の姿やその表情、住居などが描かれた絵は、当時の暮らしぶりを現代の私たちに伝えてくれます。そのため絵巻物は、鑑賞物としてだけでなく、歴史・民俗資料としても貴重であるといえるでしょう。



右図[上]「疾草紙」/37.5×820

奇病を題材に、病人と治療する人が描かれた巻物で当時奇病と考えられていた病気の種類やその症状などについても書かれていた。

[中]「桃太郎絵巻」/28.5×1550.5

桃太郎が犬・猿・雉きりを家来にして、鬼を退治する昔話。江戸時代に草双紙などの読み物になり、五大おとぎばなしのひとつとして流布し、伝承圏は全国に及んだ。

[下]「職人尽絵巻」/27.9×523.5

鎌倉時代に、歌合せに職人像を伴った絵巻として「職人歌合」「職人尽絵」と呼ばれるものが作られた。江戸時代になると「職人尽絵」が新たな題材の歌合せ絵巻として多く制作された。

この絵巻には24種の職人像が描かれ、その中に薬を調合し、煎じる医師と薬研の絵もみられる。



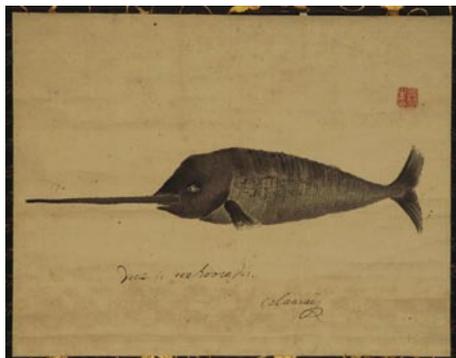
応援します



医薬の先駆者

日本の医学は、大陸からの医学の影響を受けて発達しました。そのため、中国の薬の神とされる神農を始めとして、有名な医師や学者も崇拜の対象となりました。一方、日本古来の神としては、『日本書紀』に大日貴命おおなむちのみことと少彦名命すくなひこなのみことが、病気の治療法を定めたという記述があり、そこからわが国の薬祖神として崇められるようになりました。日本における医術は、こうした神々への信仰のもとに伝えられ広まってきました。

平安時代には、丹波康頼が『医心方』を編纂し、医学の専門分野がほぼ確立されたといわれています。その後曲直瀬道三を代表とする後世派を始めとし、さまざまな流派が生まれ変遷しました。活躍した医師の足跡は医薬史の資料として現在に伝わりますが、医師の多くは病気の治療を行う専門職であるとともに、漢籍にも詳しい文化人でもありました。また、様々な分野の知識人と交流する機会も多かったため、医師の手による詩歌、書、画などの多くの作品が残されています。



▲一角之図 116.0×64.5

西洋の民間では、鯨類イッカクの歯牙は解熱・解毒剤とし、肝臓はハンセン氏病に効き、その皮を帯にするとペスト、熱病を予防するとされた。

和歌と俳諧

和歌とは漢詩に対する日本の歌「やまとうた」の意味です。和歌には長歌と短歌があり、短歌は別名「三十一文字」とも呼ばれる、五七五七七の音による定形詩のひとつです。古くから教養のある人々は、和歌をたしなみ、短冊にしたため、何かといえば短冊のやり取りを行なったようです。

俳諧は元来、和歌や連歌から派生したもので、特に近世初期に機知、滑稽という意味で俳諧の連歌とされました。明治以降、俳諧の発句である五七五の十七音だけが独立して俳句と呼ばれるようになりました。

▶柿本人麻呂画像

貞純筆／68.5×33.5

柿本人麻呂は7世紀後半の持統・文武朝の歌人。万葉集の代表的歌人で、歌聖と称された。歌は「ほのぼのと 明石の浦の 朝霧にしまかくれゆく 舟おしぞ思ふ」

資料の説明は、資料名／作者／サイズの順に記しました。サイズの単位はcmです。データのない部分は省略しました。



◀吉益東洞・南涯画像

吉益順写書／48.8×68.6

吉益東洞(1702～1773)は江戸中期の医学者で、南涯はその長男。東洞は「毒をもって毒を制する」万病一毒説を唱えた。『類聚方』、『薬徴』、『医事或問』を著した。南涯の門人には華岡青洲、賀川玄悦などがある。



▲嘗百社本草図 文久2年(1862)／淇川写／65.0×27.4

「嘗百社」は水谷豊文・伊藤圭介らなど同好の士らによって興された本草学結社。嘗百社は収集品の品評を行い、毎年物産会を開催し、植物・動物・鉱物の標本、写生図、化石、考古出土品などを展示した。



▲上図[左]人形人参

7×2

浅田宗伯薬品会出品。滋養強壯・強心に用いられた。

▲[中]亀板 14×16

浅田宗伯薬品会出品。カメの腹甲。咳や足腰の痛み、慢性下痢に用いるほか、止血・解熱・強壯薬として効果があるといわれた。

▲[右]犀角器

9.5×13.5×8

犀の角には解毒作用があるとされ、その角で作った杯を用いれば、毒が入っていたとしても大丈夫と考えられていた。

◀井原西鶴の俳諧短冊

井原西鶴(1642～1693)

は江戸前期の『浮世草子』の作者で俳諧師。句は「踏みならし 人形つかひも 駒迎」





江戸時代には木版多色刷版の錦絵が考案され、風景画から風刺画、美人画などあらゆる種類の絵が生み出されました。技術が向上して多量に安価に制作されるようになると、絵の庶民に与える影響力の大きさを憂慮し、幕府が出版統制をはかりましたが、統制の目をぬって時事的な刷物が出されることもありました。また、実用的な病気予防の方法や、養生をすすめる「はしか絵」なども多く版行されました。このほか名所案内や瓦版など、時代によってまた人々の好みに合わせて、さまざまなものが作られてきました。このような刷物は、人々の暮らしにうおいや楽しみを与えてくれたことでしょう。



▲麻疹心得草
文久2年(1862)／芳藤画(1828～1887)／25×36.5
麻疹になった時の対処や心得、食べてよい物、悪い物について説いている。
◀金毘羅神山全図 琴平山社務所
明治26年(1894)／36×49
金刀比羅宮年中祭日が記され、「金刀比羅宮御霊験は著く信仰家が夥しいことは有名」とある。
▶東都三十六景 高輪海岸 広重画
／文久2年(1862)／36.3×24.5



ミニ企画展 やさしいゲノムの世界

2003年4月14日、ヒトゲノムの解読を終えたことが宣言されました。それに伴い、21世紀は「生命科学の時代」とも「ポストゲノムの時代」とも言われています。最近、「サントリーが遺伝子組換え技術で青いバラを開発した」とか、「スマトラ島沖地震でインド洋沿岸諸国を襲った大津波による犠牲者の中には、未だに身元の判明しない人が多数おり、DNA鑑定による同定が進められている」…等々、ゲノムに関わる用語が日常でも使われるようになりました。しかし、私たちはゲノムに関わる言葉を果たしてどの程度理解しているのでしょうか。このたび、内藤記念くすり博物館では、カン研究所の竹内勝一、今井俊夫両博士に指導・監修いただき、ミニ展「やさしいゲノムの世界」を開催致しました。このミニ展を通じ少しでもゲノムについてご理解いただけましたら幸いです。

ではゲノムとは何でしょうか。一般には遺伝子“gene”とラテン語で集合体を表わす“ome”を組み合わせた造語で、「染色体に含まれる遺伝情報全体」を意味します。あらゆる生物は細胞で構成されており、ヒトの場合には60兆個の細胞から成っています。ゲノムは一つひとつの細胞の核に二重らせん構造のDNAとして入り、遺伝子はそのDNAの一部として存在します。すべての細胞には同じ遺伝子が組み込まれており、細胞分裂期にゲノムDNAは折りたたまれてX状の染色体になります。ヒトの染色体数は46ですが、精子と卵子の染色体数は23であり、両者の細胞融合による染色体数46の受精卵が細胞分裂を繰り返して機能分化することにより、新たな個性(こども)になります。遺伝子(DNA)の情報に基づいて、体や細胞の主な成分であり、生命活動に重要な機能を果たすタンパク質がつくられます。脳と筋肉でははたらく遺伝子が異なり、つくられるタンパク質も異なります。すなわち、脳をつくる遺伝子は脳のみではたらく、筋肉をつくる遺伝子は筋肉のみではたらく。つくられるタンパク質は10万種類以上あり、生命活動の必要性に応じてつくられます。まさに神秘の世界です。

くり出すタンパク質の働きや構造を調べ、その働きを調節するものを薬として開発するものです。よりの確な薬が短期間で開発されることが期待されます。また、遺伝子を構成するたった一つの塩基配列の違いにより、薬がよく効いたり副作用が出やすくなったりすることがわかってきました。それをSNP(一塩基多型)といいます。SNPを調べることで、くすりの種類や量を変えるいわゆる「テーラーメイド医療」の時代も遠くないと思われる。その他、「遺伝子診断」や「遺伝子治療」も急速に展開されています。「遺伝子診断」では、遺伝子を調べることでなりやすい病気を知ることができます。遺伝子に関係した病気では、遺伝子の変異のため必要なタンパク質がつくられなかったり、有害なタンパク質がつくられたりするので、正常な遺伝子を補充して欠けたり低下している機能を補充する「遺伝子治療」も急速に展開されています。



青いバラ サントリー株式会社提供

ヒトゲノムの解読に伴い、「ゲノム創薬」「テーラーメイド医療」「遺伝子診断」「遺伝子治療」等々の言葉が頻りに使われるようになりました。ゲノム創薬とは、病気の原因となる遺伝子を解明し、その遺伝子が

ゲノム研究により生物のしくみが解明され始めましたが、医療や薬への本格的応用は今後の課題です。一方、DNA情報は究極の個人情報であり、科学的進展と共に倫理面での法整備が求められます。ヒトの遺伝子は99.9%同じで、わずか0.1%の違いが個性です。遺伝子の違いによる差別や偏見はあってはならないことです。

館長 篠田愛信

図書館を建設します

内藤記念くすり博物館では、大同薬室文庫を中心とした和装本のコレクションが充実したため、保存と活用を目指して、図書館を建設することとなりました。

図書館は2階建てで、医薬に関する書籍(洋装本)をおさめる開架スペースと、貴重な和装本・資料をおさめる閉架スペースに分かれます。6階建ての本館を中心に、左右対称の美しい構造は、当館の創立者である故・内藤豊次が当初から構想していたものです。今秋には建物が完成する予定です。

なお、蔵書自体は医薬史の文献ほか、研究者向けのものが中心で、学術目的の調査研究用にご活用いただけると幸いです。完成を楽しみにお待ちしております。



▲完成予想図 本館をはさんで、向かって右側が展示館、左側が図書館

くすり博物館のあゆみ

くすり博物館ができたのは、1971年(昭和46)です。当時は本館の3～6階で展示を行っており、エレベーターができるまでは玄関でスリッパに履き替えて、階段で上がりました。

展示館(新館)ができたのは、1986年(昭和61)です。資料・図書の増加により、展示と保存スペースを拡大するために増設しました。展示館には企画展示室が設けられ、これまで館蔵資料を中心とした数々の企画展を実施してきました。



企画展出版物

「大同薬室文庫資料目録」

定価 1,500円

今年度の企画展で紹介する資料を写真で紹介するとともに、大同薬室文庫の資料を網羅したリストを掲載しています。リストには、医薬史のみならず、書画・絵図・地図・絵巻物・短冊類など、各分野の文献資料が多数含まれています。研究者の方は、ぜひお求めください。



■新収蔵資料

青森市・三浦駿様より、旧・三浦医院で使用されていた回転式の薬品入れなどの医療用具(写真左)をご提供いただきました。名古屋市の種村綾子様からは、旧・ホルモン薬局で使用されていた旗看板や販促品の薬入れなど(写真右)をご提供いただきました。

■植物画ギャラリー展開催中

1～4月は冬の部、4～7月は春の部の作品を展示しています。受講生のグループ毎に交代で作品をご提供いただいていますので、ぜひ定期的にご覧ください。作品の概要はホームページをご覧ください。



■植物画講座の日に変更

これまで植物画講座は、第4土・日曜日に開催してきましたが、今年度より、原則として第3土・日曜日とします。ただし、館の都合で別の週に変更となる場合がありますので、スケジュール表をご確認ください。

■壁紙カレンダーをダウンロード

パソコン用語で“壁紙”とはデスクトップの背景のことです。インターネットからダウンロードすることができます。「くすりの博物館」の壁紙には3ヶ月分のカレンダーがついているので、便利で人気があります。毎月少しずつ更新し、季節に合った壁紙を選ぶことができます。ぜひご利用ください。



■『くすり博物館だより』もダウンロード

5月下旬から、ホームページで『くすり博物館だより』をご覧いただけるようになります。PDFファイルですので、ダウンロードして印刷することも可能です。ぜひご利用ください。

なお、年2回郵送希望の方は博物館までお申し込みください。



お詫びと訂正

『くすり博物館だより』50号の1ページ目に掲載された建看板「宝丹」の説明中に間違いがありました。誤「高野万太郎」→正「高野万次郎」お詫びして訂正いたします。

◆◆資料・図書ご提供者ご芳名◆◆

遠藤次郎 大浦宏勝 草笛由美子
河野亨 小竹英夫 鈴木和 長野仁
中村輝子 ホルモン薬局(種村綾子)
前根寿文 三浦駿 水野瑞夫 寄金丈嗣
～ありがとうございました～

(敬称略/五十音順)

内藤記念くすり博物館

開館/9:00～16:00

休館/月曜日

年末年始(12/28～1/8)

館長 篠田愛信

学芸員 稲垣裕美(編集担当)

学芸員・司書

野尻佳与子・伊藤恭子

庶務 森田麻起子

小島敦子(見学受付)

沼田 望(見学受付)

薬用植物園(栽培管理)

菊谷辰行 栗本裕隆 亀谷芳明

顧問 青木允夫

アドバイザー 逸見誠三郎

薬草園フェスタ

2005年5月21日(土)

10:00～15:00

自然工房・染め物・綿菓子作りなどの体験コーナーや、軽食コーナー、プレゼントコーナーがあります。親子で一日楽しめますので、ぜひお越しください。なお、今年は今話題の植物・ヤーコンを紹介するコーナーもありますので、お楽しみに。

駐車場のお知らせ

図書館を建設にともない、本館北側の駐車場が使用できません。工事の日程・来館者数により、臨時駐車場の場所が変わりますので、ご来館の折には、表示をよくご覧いただき、車を進めてください。なお、薬草園フェスタ当日は、博物館南西の臨時駐車場をご利用ください。